不幸な少女

k―san

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
いじらしく咲く菊の花手折る。

目次

不幸な少女 ―――― 1

不幸な少女

1

やさしい花柄あしらった
淡いピンクのきれいな衣装
絵本の中から出てきたような
白菊ほたるはお姫さま
きらきらかがやく舞台の上で
もらったものを返すため
嘆きの声をいつくしむかの
祈りの歌をうたっている
彼女の歌に救われた人が
赤、青、黄色を振り回し
ひとつの色が　ひとつの想いが
重なる奇跡　魔法のよう

2

わたしの受難を見守り続けた
最愛の人に報われてほしい
せつな願いを手紙に込めて
両親に贈る　招待状
むろんふたりは諸手を挙げて
娘の親切　喜んだものの
しかし男は折あしく
ひねもす我が家に　とどまることに
都合をつけた母親は
単身　娘の活躍を見に
慣れぬ都会をおとずれて
右往左往し　みぎひだり

3

最高の瞬間(とき)を観ていてほしい
ほたるは大きな勇気を胸に
舞台を駆けて　歌をうたう
熱気はうつり　観る者を沸かし
天にも届く　歌となり
それは奇跡も魔法も超えて
ひとのこころをうごかした
かつてないほど高らかなそれは
母が観てると感じればこそ
いつしかほたるはそれさえ忘れて
がむしゃらに
ただ　がむしゃらに

……
実はこのとき　ほたるの母は
娘の舞台を観ていない
娘のもとへと向かう最中に

車に撥ねられ病院へ

4

報せを受けたほたると父は
それぞれ急ぐ　母のもと
ほたるが着いたちょうどそのとき
母の鼓動は鳴り止んだ
父は彼女の死に目に会えず
それから人が変わったよう
誰かを救う仕事を辞めた
ほたるは父に付き添った
ところが父はほたるを邪険に
母を殺した罪を責め
そうして罪には罰があるぞと
娘をその手で苦しめた
それでもほたるは父が憎めず

授業の時間もうわのそら
どうすれば父が救われるのか
そのことばかりを考える

5

あるときほたるは思い出す
初めて贈ったもののこと
怜悧（クール）と思った黒いネクタイ
自分の稼ぎで買ったこと
おいおいそれじゃあ喪服じゃないかと
父は呆れて笑ったが
内心なによりも喜んで
耳目も構わずつけたらしい
再び父の笑顔が見たくて
手もとにひそんだ円い箱
白い包みに赤いリボンの

それを渡して大団円
家に帰ってきたのだが
中は静かで試験のよう
父はどこかと進んでみると
彼はトイレで息絶えていた
首にくくったひも状のそれは
ぴんと張って　ドアノブに
怜悧と思った黒いネクタイ
ほたるの指から包みが落ちる

6

それからほたるを引き取る者は
謎の変死に見舞われて
いつしかほたるは死神と呼ばれ
彼女も自分を死神と呼ぶ
彼女はひとりで生きると決めて

昼夜の区別もお構いなしに
街をさまよい歩いてみたが
やがて疲れて公園へ
すると先客　子猫が一匹
足を怪我して動けずに
腕の包帯ほどいて洗い
子猫の右足　治療する
きみもわたしと同じなんだね
陳腐なセリフを言って笑うと
恩を知らない黒い子猫は
素早く逃げ出し夜に消える

7

お日様見える　そのときまでに
ほたるは公園　あとにする
ふたたび街に　繰り出していると

思わぬ人が　声かけた
彼はほたるの恩人で
まばゆい世界の導き手
ほたるを捜してここまで来たと
あのときのように手を伸ばす
ちらりと見えた眩しい光
誓いの指輪　薬指
なんとも言えぬ　苦しみに刺され
ほたるは彼の手を払った
わたしといると不幸になると
告げるが早いが駆け出して
彼の気配がなくなったあとで
後悔の念が広がった

8

途中ほたるのすぐ横を

サイレンの音が通ったが
ほたるはそれすら気づかぬほどに
心の声に　苛まれている
じくじく広がる傷口を押さえ
ほたるはどこへ　向かうのか
もはや行くあてもないと言うのに
いったいどこへ　向かうのか
結局どこにもたどり着かず
どことも言えぬ　路地裏へ
それからほたるはひねもす空を
ただ眺めては　過去だけを想う

9

あれから何日経ったのか
ほたるの身体はずいぶん痩せた
このままじゃ埒が明かぬと思い

ない力を出し立ち上がる
空腹で足がふらつくものの
このままじゃ餓死を待つだけだ
とにかく口に　含めるものを
死を前に生が惜しいのだ
そうして歩道に出たところ
路上に移る　車に轢かれて
彼女は瀕死の重みを背負うが
それでもほたるは生きている

１０

とにかく生きたい　それだけ願い
這って進んだ先には花壇
手折られぬ花　ほたるは憧れ
わき目も振らず　手を伸ばす
少しずつだが　身体は前へ

花は目の前　ほたるはそれを
抱こうと身体をよじったところで
頭に花壇が突き刺さる
哀れな果実が潰れた音が
響いて地面は赤く濡れ
ほたるの生命(いのち)はここでおしまい
最期まで不幸な少女のままだったね

11

不幸な少女の最期を見下ろす
視線は高い　塀の上
危うい花壇でじゃれてた子猫の
足には汚れた包帯が

『不幸な少女』了